

当日の避難行動についての検証のポイント

- 移動開始は津波到達の1分前。
- 狭く、行き止まりのルートを通して、川に向かって移動。

あの状況においては明かな判断ミスです。何がそのようなミスに結びついたのかが検証のポイントです。このことは、震災間もない時期に既に明らかになっており、平成24年10月28日の市教委との話し合いで、遺族有志が明確に指摘し、資料も提出しています。

なぜ川に向かったのか

なぜ、三角地帯（川）へ向かったのか。しかも、ルートは「狭い」「山のそば」「行き止まり」です。最大の謎ですが、多くの証言により、以下のポイントに着目する必要があります。

- 三角地帯へ向かうには不自然なルート
- ポンプ小屋の前の広い門は開けていない。自転車小屋の脇の列でしか通れない所から校庭を出ている。
- 市教委の説明にあるように、三角地帯という選択肢は本来なかった。
- その後引き取りに来る保護者に対応するため、校庭に残った先生がいる。
- 列になって歩いて移動を始めて、すぐに教頭先生が「津波が来ているから急いで」と言い、走り始めた。

共有されなかった危機感

市教委は23年6月までは「山にするか、三角地帯にするか迷った」「山は倒木があり（あったように見えて）危険と判断」と説明していましたが、1月22日の説明会では、その後の聞き取り調査などをふまえて「山か三角地帯かで迷ったのではなく、山か校庭しか選択肢を持ち合わせていなかった」と説明。

ところが、向かったのは三角地帯です。市教委は「推論」と断った上で「三角地帯って話が出たのはかなり遅い時間帯」と述べています（議事録10, 11/21）。その理由は明確に説明できていません。

この部分を考察することは重要です。

「山への避難」は早い時間に提案されています。教員、地域の人、迎えに来た保護者、そして子ども達。あれだけの揺れの後、けたたましく鳴り響いた警報で、誰も危機感を持たないはずはありません。しかも、目の前には授業で登った山があるのです。

少なからず抱いていた**危機感を共有し、組織の意思決定につなげられなかった**のです。

避難行動、すなわち命を守るための意思決定の足かせになったのは何なのかは、別に述べます。